

米づくり情報（NO. 9）

令和元年8月13日

伊万里・西松浦地区農業技術者連絡会作物部会

1 気象概況（アメダス観測地：伊万里）

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
8月	1	27.4	28.9	32.2	34.0	23.7	24.9	28.7	0.0	34.0	55.9
	2	27.4	27.7	32.2	32.9	23.7	23.8	31.2	25.5	32.8	26.1
	3	27.3		32.0		23.8		35.9		30.1	
	4	27.0		31.7		23.5		38.1		28.7	
	5	26.6		31.3		23.0		38.3		28.7	
	6	26.1		30.9		22.4		45.4		35.2	

1) 8月1～2半旬は平年と比較して、平均気温は平年より1～2℃程度高く推移した。また、降水量は平年より少なく、日照時間は多照傾向で推移した。

2 生育状況（8月13日）

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	莖数 本/㎡	主稈 出葉数L	葉色 SPAD	概要
ヒノヒカリ 6/19移植 松浦町桃川	本年値	84.7	391	12.9	34.7	・草丈は平年並であり、莖数は少ない。 ・主幹出葉数は平年より少なく、葉色は薄い。
	平年値	86.2	458	13.5	35.9	
	平年比	98	85	-0.6	-1.2	
たんぼの夢 6/18移植 松浦町桃川	本年値	74.9	431	13.0	38.9	・草丈は平年並であり、莖数は平年よりやや少ない。 ・主幹出葉数は、平年並であり、葉色は薄い。
	平年値	74.5	454	13.2	40.2	
	平年比	101	95	-0.2	-1.3	

※夢しずくの耕種概要は、稲作情報 No.2 を参照。

※夢しずくの出穂期は8月9日となった。

※ヒノヒカリ、たんぼの夢の耕種概要は、稲作情報 No.3 を参照。

3 今後の管理

1) 山間早植え水稻（5月上旬移植）

- ・乳熟期を迎えている。
- ・カメムシの防除を徹底するとともに、収穫1週間前までの間断灌水により実の充実確保に努める。

2) 普通期水稻「夢しずく」

- ・出穂期～穂揃い期を迎えている。
- ・穂孕み期から穂揃い期にかけては、イネの用水要求度が高い時期であるため、水が切れないように圃場の水管理を徹底する。
- ・この時期は強風による影響を最も受けやすい時期であるため、台風の接近等が予想される場合は可能な限り深水とし、強風による障害を緩和するよう努める。

《参考 8月13日時点の生育状況》（伊万里市二里町）

移植日	草丈(cm)	茎数(本/株)	葉令	備考	出穂期
5月23日移植	—			標高100m	8月3日
6月6日移植	95.3	20.1	12.8	標高180m	8月16日頃

3) 普通期水稻「たんぼの夢」、「ヒノヒカリ」等

- ・中干し作業は終了し、間断灌水へ移行する。
- ・「いもち病」が発生している圃場が散見される。進展型病斑が確認された場合は、速やかにオリブライト粒剤等で適切に防除を実施する。
- ・穂肥施用の時期となっているが、上位3葉にいもち病の発生がみられる場合は穂肥を控える。

《参考》出穂期の平年値

ヒノヒカリ	8月26日頃
たんぼの夢	8月27日頃

4) 共通

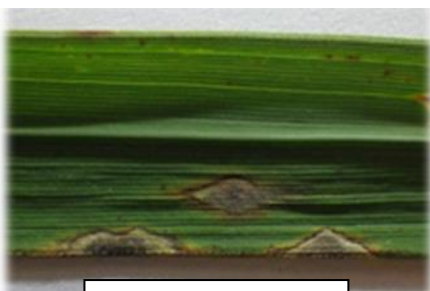
①いもち病

- ・葉いもちの発生が見られる圃場や地域では、穂孕み期の防除を徹底する。また、発生が多いと予想される場合（上位3葉に病斑が確認される）は、穂揃い期にも臨機防除を行う。

※いもち病の発生が著しい場合、間断灌水における落水期間を長くすることで病気を助長することがあるので注意する。

【穂いもちの防除適期】

病害虫名	稲のステージ	出穂前後日数							
		-15	-10	-5	0	+5	+10	+15	+20
穂いもち	並発生の場合 多発生の場合			↔	↔	↔			



いもち病（進展型）



いもち病（停止型）

②ウンカ類

※8月1日に農業技術防除センターより「トビイロウンカ」の発生予察注意報が発表された。

※7月30日～31日にかけての農業技術防除センターによる県中西部を中心とした臨時調査（33圃場）では、トビイロウンカの発生圃場率は60.6%であった（伊万里市の調査では5圃場中1圃場で幼虫1頭確認）。これは、8月上旬の定期調査での発生圃場率（平年9.1%、本虫が多発生した2013年は37.5%）より高い。また、増殖率が高い短翅型雌成虫が既に散見されるとともに、一部圃場では本虫の急激な増加を確認しており、嬉野市の調査においては10株当たり218頭（成虫45頭、幼虫173頭）確認されている。




※セジロウンカの飛来量が少ない年は、トビイロウンカの増殖率が高まる傾向にあり、本年は、セジロウンカの飛来量が少なく、トビイロウンカの増殖に好適な条件となっている。











※7月24日発表の九州北部地方の3ヶ月の予報では、8月の気温は平年並か高いと予想され、本虫の増殖にやや好適な条件となっており、発生が更に増加し被害を生じる恐れが高まっている。

※特に、フルスロトル箱粒剤ではなく、ブイグットプリンスリンバーL粒剤等を使用している圃場では、注意して圃場を観察しウンカ類の発生状況把握に努める。

【ウンカ類の見分け方】

ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中～老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウンカ	白っぽい	灰白の斑紋	 : 真横
トビイロウンカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	 : 真横～やや斜め後ろ
ヒメトビウンカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 (体側の色が濃い場合あり)	 : 斜め後ろ

		トビイロウンカ	セジロウンカ	ヒメトビウンカ
成虫		 長翅雌  短翅雌		 雌  雄
幼虫	若齢			
	中齢～老齢			

トビイロウンカ各世代の発生予測（2019年7月24日作成）

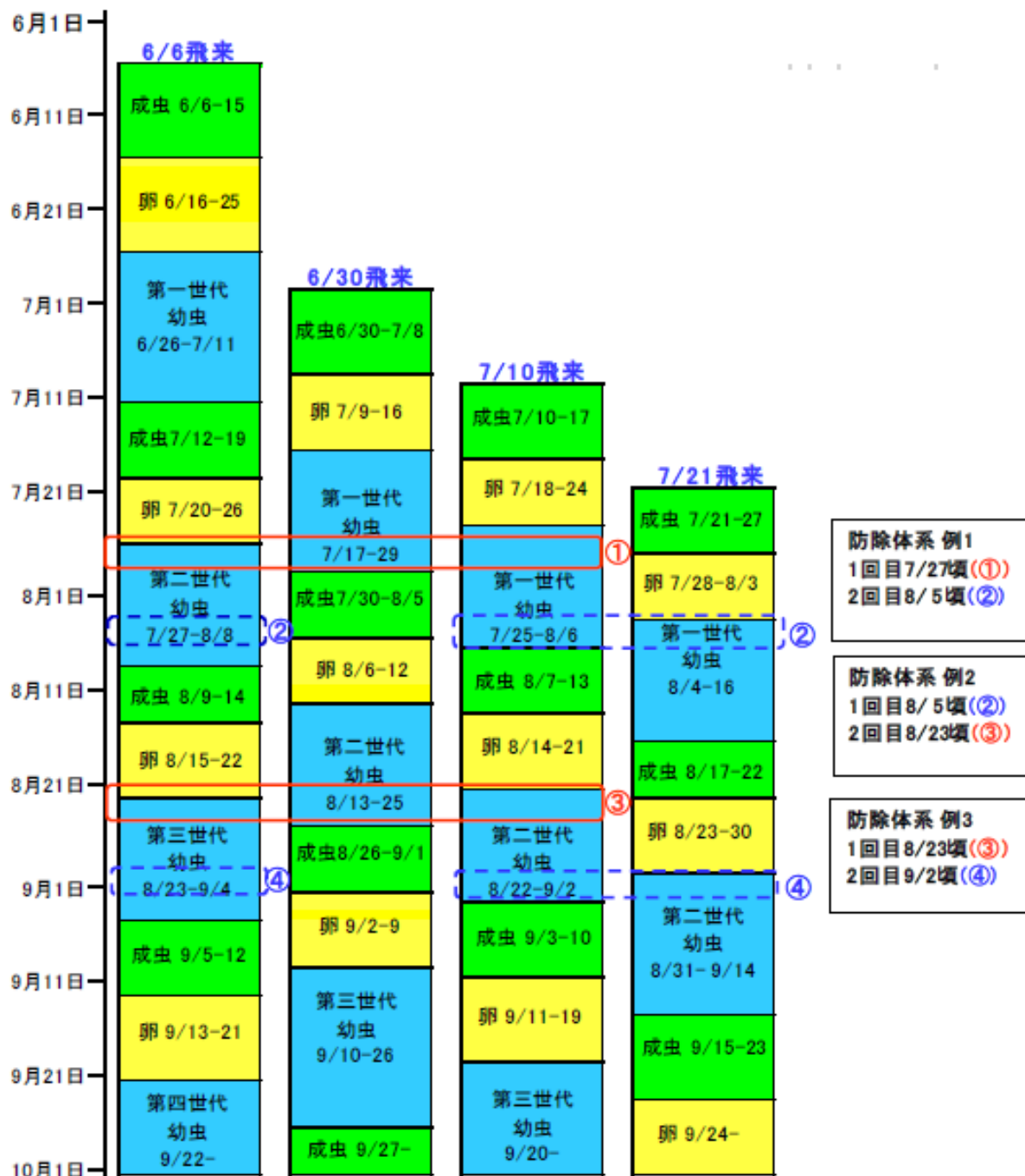


図2 トビイロウンカ各世代の発生予測(第5版、2019年8月1日作成)

- 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(第4版では7月22日までは実測値で以降は平年値、第5版では7月31日までは実測値で以降は平年値)を基に作成した。その結果、第5版は第4版と比べ、各飛来虫の、その後の発生時期は約0～1日遅くなったが、全体としてほとんど変わらない。
- 普通期水稲には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。この例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。
- 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なる予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。
- 田植え時期に加え、地域、水稲の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
- 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

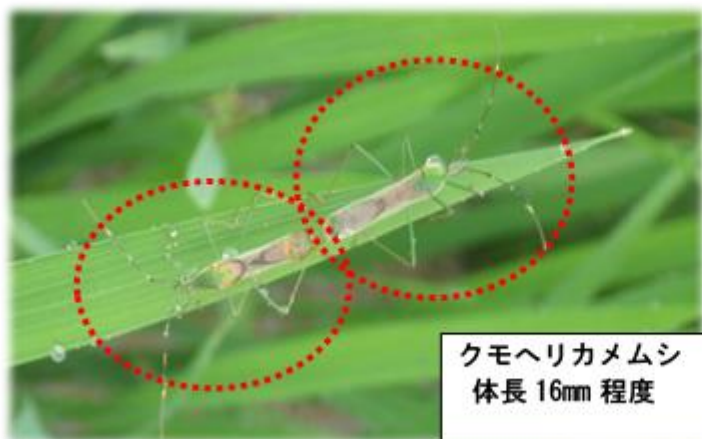
③カメムシ類

- 耕種的防除として、出穂 10 日前までには必ず畦畔の草刈りを終える。出穂後に行くとカメムシ類が圃場に侵入し、被害を助長する。
- 薬剤防除としては、乳熟期（出揃い期の約 10 日後）の防除を徹底して、斑点米の被害防止を図る。発生が多い圃場では穂揃い期（出穂期の約 5 日頃）と乳熟期の 2 回防除を実施する。

★多発生の目安 ⇒ 20 回のすくいとり調査でカメムシが 5 頭以上の場合

【カメムシ類の防除適期】

病害虫名	稲のステージ 出穂前後日数	防除適期							
		-15	-10	-5	0	+5	+10	+15	+20
カメムシ類	並発生の場合 多発生の場合						←→	←→	←→



クモヘリカメムシ
体長 16mm 程度



ホソハリカメムシ
体長 11mm 程度

④紋枯病

- 昨年度形成された菌核が伝染源となるため、昨年度発生した圃場では薬剤防除を徹底する。

病害虫名	稲のステージ 出穂前後日数	防除適期							
		-15	-10	-5	0	+5	+10	+15	+20
紋枯病	並発生の場合 多発生の場合	←→	←→			←→	←→	←→	←→

⑤コブノメイガ

- 本年は、ここ数年と比べてコブノメイガの発生・食害が多い。
- コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期の7日後（幼虫孵化揃い期）である。被害葉が多くみられる圃場では、蛾の発生状況に応じて臨機防除を実施する。

⑥稲こうじ病

- 本病は土壌伝染病であるため、昨年発生が確認された圃場では適切に防除を実施する。
- 薬剤防除として水和剤や粉剤を使用する場合は出穂の20～10日前に、粒剤の場合は出穂30～20日前を中心に防除を実施する。また、肥料が遅効きしないよう適切な肥培管理を行う。

令和元年産水稻生育期間気象グラフ (アメダス：伊万里)

西松浦農業改良普及センター

